



Title	T. S. Eliotのペイタア考その他
Author(s)	奥天, 栄二
Citation	北海道教育大学紀要. 第一部. A, 人文科学編, 17(2): 80-89
Issue Date	1966-12
URL	http://s-ir.sap.hokkyodai.ac.jp/dspace/handle/123456789/3921
Rights	

T. S. Eliot のペイター考その他

奥 天 栄 二

北海道教育大学旭川分校英文学研究室

Eiji OKUTEN : Eliot's Criticism on W. Pater, etc.

1930年、T. S. Eliot は“Arnold and Pater”を Bookman の9月号にのせたが、同時に標題のみが変更されて Walter de la Mare 編纂になる剣橋王立文芸協会の編年史的研究論文集“*The Eighteen-Eighties*”のなかに、“Place of Pater”と題して出た。これは大切なことであって、それが1880年代の精神的状況を、よく打診したものとされたと考えられる。それから2年おいて1932年、Eliot の主要なる批評のまとめとしての選集、*Selected Essays* のなかに“Arnold and Pater”としておさめられた。

いずれも内容は同一であって、1930年に、はじめて発表された Eliot の criticism である。

“Arnold and Pater”で Eliot の意図した所のものは、先ず Arnold の再吟味から始めて、次に Pater への批判を Arnold のそれに照応していって、両者相まっつての解明をめざし、かくしながら彼等二人の当時の思潮のうちに占めている位置、あるいは果している役割をば、明確に検討した上で、これに果敢なる診断をば下したことだ。この際注目すべきは、Arnold と Pater を関連させる場合に、Eliot は Arnold と Pater を結びつけて、その等しくしているカテゴリーをば、Eliot の所謂あやまった humanism 排撃の上に、見出そうとした点である。つまり Arnold と Pater はともども、Eliot の humanism 批判へのなかに、Eliot の anti-humanism 論展開の方向に、取りあげられていった。

T. E. Hulme の灰燼の思想 (*Speculations*) (1924)によれば、1880年代にはすでに『連続の原理』(principle of continuity)が完成応用されており、神性と人性との間に確然と引かれてあるべき不連続の一線がくずれて、その間を不分明な歪んだ連続性が蔽ってしまっていた。Eliot はこのような状況のなかでは、或る種の情緒を伴った、しきりなる価値の置き換え、すりかえ、その代用変装が、色々様々に行われてくるとみる。先ず religiosity (宗教らしさ)ともいうべきものと humanism が、甚々任意に融和しようとしかかり、ついでそこの混濁したものが、真正の religion に取って代ろうとする。そんな機微な箇所には、Arnold と Pater は夫々ひとしく位置すると Eliot は規めたのだ。

※

“Arnold and Pater”の冒頭の辺で、Eliot は『この小論の目的は、Arnold に始って、Pater を経て、90年代に至る一つの方向を、指し示すことである。勿論その背景には、Newman という

孤立せる人物が存在したのであるが¹⁾』と切出して、彼の意図が那邊にあるかを示唆する。

以下詳しく Eliot の眼目とする所を要約してみると、先ず Eliot によれば、Arnold は宗教を感情の無政府状態によって荒れるままに放任しておいて、宗教の地位に所謂“Culture”『教養』を打ち立てようとし、文学及び教養によって宗教の地位を奪い取ろうとさせるのであるが、では Arnold の指す宗教の代用をなす教養とはどんなものかという、結局読めば読むほどわからなくなるものであって、つまりは教養は各自勝手に解釈してよいものであるから、そこで Pater の福音が Arnold の予言の跡に当然やってくることになるという。

それでは一方、Pater はどうしたかという、宗教を流用することに於いて、Pater は情緒の方面から感覚の方面からこれをやったのであるが、それは Arnold が許しを与えたことをやったにすぎないことになる。

Pater は宗教の置き換えに、情緒や感覚を使う、そこで芸術的宗教だとか、宗教的芸術が生まれてくる。宗教が道徳律になったり、芸術になったり、哲学その他になったりする。こういったような不完全な下手な勝手な総合や、雑多な連続的な連結をもたらさんとする、盲想的な試みへの傾向に対する批判の上に、Eliot の Arnold と Pater 批評は成り立っている。

※

これから Arnold への言及は先ず控えることにして、(実は Eliot 自身の criticism 形成の主要なる先達は Arnold であるから)、Eliot が Pater の religiosity に直接触れている箇所がなんといっても興味のそそがれ所であるので、一通りこの religiosity 論議にしぼって述べてみる。

Pater の創作“享楽主義者メアリアス”(Marius the Epicurean) は、Eliot によって、『英国に於ける教養と宗教との波動的関係の一局面を標示するものとして取りあげられる²⁾』、『“享楽主義者メアリアス”は教養ある人々と知的指導者による天啓宗教(revealed religion)の排撃が、視覚美に対する興味の復活と一致している所の、あるイギリス史上の一点を示すものであって…³⁾』、『Pater または“Marius”が、Aurelius の瞑想録と福音書の間にある飛び越えねばならぬ溝を理解したとは思われない⁴⁾』、『“Marius”は単に基督教会の方へ漂っていったにすぎず、宗教の発展の直接的潮流とはなんの関係も持たぬ⁵⁾』、『“Marius”は、終りまで、なかば覚醒した魂としてのみとどまっている。彼の臨終に際して、彼が受けることを許された儀式のさなかに於いてさえ、彼の著者の反省は、「彼は昔、曇った日や、雨の降る日に死なないということだけでも、そのなかに、多少慰めとなる慈悲や恩寵があるのかも知れないと、たびたび空想した」というようなことに言い及んでいるのであって…⁶⁾』、『“Marius”の主な意味は、それが Carlyle, Ruskin, Arnold, Tynnyson. Browning らの宗教が不十分であったことを思いさしめる点にあって、Pater が Coleridge について書いていた言葉、「その和諧音が近代文学を貫いて響いている所のあの汲めども尽きぬ不満感、倦怠、郷愁……」という言葉で、“Marius”は再現し、しかも Pater は Coleridge その者よりも一層積極的にその言葉を代表している⁷⁾』。

これが Eliot による Pater の“Marius”への結びである。まことに Pater は、Marius の抱くねんごろな魂が、消えいらんばかりの風情をみせつつも、降り積むかそけき音に魅入られて、憂愁にみちる基督の領域へと、漂うていったことを指摘したのであった。

Eliot が Pater の religiosity をこんなふうにきめてかかれるのは、Eliot が Pater を目して、なににもまして彼が、先ず moralist であったと規定してかかるからである。Pater は芸術、批評、人生をかりて、絶えず倫理を唱導しているわけで、Pater を審美主義者と呼ぶから混乱する

のであって、Pater の芸術のための芸術は、Arnold の “Culture” の子孫であるのである。それは審美的宗教と宗教的芸術の間から生れた申し子みたいなものである。『“芸術のための芸術”を正当に実践することは、Flaubert や Henry James が献身した所であって、Pater はこれらの人達の組に入っていない⁸⁾』。

このように Pater は Eliot によって、芸術のための芸術の人でなく、かえってその他のための芸術の人と規定されたが故に、或る種の情緒を伴った religiosity への流用に、Pater はやすやすと道をゆずるわけだとされる。

Eliot は “Arnold and Pater” のなかで、Pater の想像的描写が、病的なものや肉体的疾患に関したものを強調する傾きのあることを指摘して、Pater の Coleridge 研究がこの魅力にみち、また Pater の Pascal 論では、Pascal の疾患が彼の思想に影響を与えた点を強調し、Pascal の最も重要な部分が見逃されていることに反駁する。

このような Eliot の論調をまねるならば、Pater の Pater に於ける religiosity への尽きせぬ思慕らしきものは、暫く “Arnold and Pater” を離れてみても、Pater の著書のなかの方々に、そのたちがたき響をば煽煽と、かなでていることが見受けられる。

たとえば “The Renaissance” のなかの ‘Pico della Mirandola’ などがそうで、伊太利の名家 Mirandola の伯爵 Pico は古代のあらゆる哲学を暗んじ、ギリシャ宗教とキリスト教とを調和しようとする熱病のような消耗性の思念にかられるのであるが、これは Pater によってルネッサンスの humanism 精神であることが認められる。そうして Pico から Pater が最も興味の惹かれる所は、Pico が遂には少年の頃の、なにかの感触に似た単純な信仰に立ち帰らねばならなかった点で、Pico が改宗らしきものの後に於いてもなお古代のギリシャの神々を忘れなかったことにあるようである。Pico の宗教は humanism の宗教で、救いは教理になく、情緒に、信仰でなくて感傷的な敬虔にあるわけで、これは畢竟 “Marius” にそうであったものに似ている。

また Pater の Amiel 論を覗いてみても、Pater が Amiel のなかに同情を以て共感を共にする所は、Amiel が絶対の探求からも相対の追求からも、戦慄を覚えて尻込みする箇所で、Amiel は様々な宗教的観念を受入れながらも、そうさせない敵意的な個性のために、何の希望もなく突然信仰を停止してしまう。信仰の停止といえ、例のころざし篤きこと一方ならぬ Marius の精神も、出発から臨終まで徐々に一筋のおもむろな成長をとげて、魅入られた調和に到達したげに見えるが、事實は最初から信仰を停止してかかるかのようであった。それでは真の改宗のあり得ようがなく、かりにあり得たとしても、改宗ということが、専ら唐突のものとしか取られないのも無理はない。

次に Pater の religiosity を伺うために、彼の絶筆 Pascal 論にふれると、この Pascal は全く視覚的な美や唯美的生活をば疑惧し躊躇したあげく、啓示的な想像そのものさえ、肉体の病疾のように彼を悩まし煩いを与えるのであって、ついに不可避的に神に救われるか、不可避的に神に見放されるか、その中の一つがあってその中間のない Pascal である。なんとも癒しがたい精神的痼疾者としての Pascal である。いつもかたわらに深淵が口を開いているわけで、恟恟と Pascal はステッキか椅子で身をささえなければならなかったほどである。

なお蛇足と思うが、Eliot 自身の Pascal 批評としては、1931年 Everyman Library の “Pascal’s Pensées” への Eliot の序文があり、そのなかで、Pascal の三つの秩序、精神自然慈愛は、不連続性のものであって、進化論でいう高次のものが低次のものに含まれているものでないことを述べ、この点 Pascal は Descartes よりも高い位置にあると指摘されている。

さて Pater の religiosity の項を終えるにあたって、A. C. Benson の穏当な意見と、P. E. More の解釈とを引用しておきたい。

先ず Benson はいう、『併しながら Marius の接神の弱さはどこにあるかという、基督教を他のあらゆる宗教的組織から分つところの同情の力、及び愛に対する基督教的考えを力説しないで、Marius がその感覚に訴える力、その儀式的の荘厳さによって改宗したこと、言い換えると、信仰の闕へと近づくかされていったことである。……これらの性質は本質上人間的なものである。そおして更に著しいことは、Marius が基督教のなかに認める平和そのものさえ、かの古代の哲学的平和の繰返しである⁹⁾』。この個所は Eliot も “Arnold and Pater” に引用しているものである。

もうひとこと、Benson を任意に引用すると、『Pater がロンドンに住んでいた際、処々の寺院に詣でる彼の姿が見受けられた。併し彼が国教や Roman Catholicism につながったという証拠はなにもない。彼は宗教に深い平穩の力あることを見出した。それから宗教の本能や信仰の直観を、芸術的乃至知的影響よりも、一層直接的な確かな神聖な影響として認めた。かくて彼の知的精妙さが、彼の信条の明確な決定を阻んだとはいえ、Pater はなお完全の美や基督教的理想の神聖によって深く貫ぬかれており、かの父なる神の胸のうちの、打震える信願のなかにとこしえに睡った¹⁰⁾』。

幾分猪突としてではあるが P. E. More の Pater 批評に移ると、P. E. More は I. Babbitt と相並んでアメリカの new humanism の旗頭であるが、(Eliot はかつてのおのれの師匠にあたる Babbitt の new humanism の提唱を、結局 new humanism を以て宗教に置き換える点で、きつく反撥したのであるが)、P. E. More は、その著述 “The Drift of Romanticism” の第三章の ‘Walter Pater’ に於いて¹¹⁾、彼は Pater の主要なる著作として、“Plato and Platonism” と “Marius the Epicurean” と “The Renaissance” の三作をあげている。Moreによれば Pater は、以上の項目で、歴史上の三つの最大なる精神、Platonism と Christianity と Renaissance 思潮を処理しようとしたが、結局の所、いずれも Pater は ‘reality’ を誤るものに終わったという。すなわち More の云分を、はっきり規定的に要約してみると、“Plato and Platonism” では Plato 自身が伝えんとするものと違ひ、 “Marius the Epicurean” では、Marius は聖 Paul や聖 Augustine によって認められた christianity と異なるというのである。また “The Renaissance” では、Pater には歴史は彼自身の自我の拡大にすぎなくて、Renaissance そのものではないことになる。ひっきょう Pater は、これらの偉大な時代の深奥な意味を理解するのに失敗したと、More によって裁断されるが、その違った個所を理解しようとかかった者は、More によって昏迷を覚える。

たとえば “Marius” が christianity と相違するなら、それがどう違い、どうあらねばならぬことかは、Eliot のいうように、『“Marius” が後世の第一流の精神をひとつだに影響したとは信じない立場』を待って、はじめて諒解するものがある。

このような Eliot の発言を促してやまぬ信念のようなものは、とにかく現代の批評の在り方の根底にあらねばならないもので、この当時の Eliot の批評は、現代の無秩序から積極的な秩序を産み出そうとする切実な衝動の現れである所の、過去と現在及び未来へのきつい関心で裏打ちされて、過現未を一丸に結びつけながら、先ずなによりもさきに現代を批評しようとかかる態度が確持されている。従つてこの頃の Eliot のひたむきな現実関与は、当面する現代の創作をさしおいても、先ずなによりも第一に現代の批評へと立ち向おうとする。

Eliot の “Arnold and Pater” 論は、時代の病弊と思われる、無拘束な humanism のほびこ

りに対する、切実な彼の humanism 批判をかりた、Eliot の現代批評であった。

※

Eliot の批評活動は1917年頃から始った。彼の初期の頃の criticism はもっぱら詩の integrity (十全性や全一性)、詩のための詩、他の何物でもない所の詩という問題に専念した。ついで1928年という年になると、彼の批評の立場は、可成りの転機を孕んでくる。“Sacred Wood”再版序(1928年)のなかで、詩がよき詩であるために、詩の真の integrity を一層高めるために、詩は道徳、宗教、多分政治にさえも関係するものであることを確認し、Shakespeare よりも Dante を好むと明言した。これは Eliot によれば、詩の integrity の変化や取消しではなくて、かえってその拡大であり進展であり深化であるとされた。つまり詩がなによりも先ず詩でなければならぬことが、現代の場では、それがそのままでは許されなくなったことへの、一種追撃的な構えからくる作用として、詩の integrity 性に対するあらたなる強固な立場をば確保しようとしたことだった。

だから Eliot の抱く詩の integrity 性は、Pater の「芸術のための芸術」をばかえって anti-integrity とみたてたうえで、Pater を一個の情緒的な倫理の唱導者と規定し、Pater を Eliot の humanism 批判の試論のうちに処理したのだ。

Eliot の初期の頃の、詩のための詩の詩論、詩の持つべき詩の integrity 性の提唱は、当面する世紀末文学の諸傾向にしきりに反撥して、詩が本質的に enjoyment であった18世紀後半前の integrity にかえってきつく結びつこうとする。Eliot には、18世紀後半前までの詩のための詩はとにかく詩の integrity から離反するものでなかったのだ。ために Pater 及びその後継者共の唱える芸術のための芸術は、18世紀後半に至るまでの詩のための詩とは違った意味を持つと、Eliot によって洞察されてくるのである。

ここでの Pater は、一個の情緒美的な倫理主義者とされる。Pater の創作が問題にしているのは、なにかと倫理説であって、芸術ではなく、人生である。その通りこのまま、Pater は Eliot の humanism 批判へと導かれていくわけである。それから1932年になると、Eliot はその公開講演“宗教と文学”に於いて、文芸批評は倫理的宗教的観点からみる批評によって、完成されねばならぬと、公然と宣言するに至ったのであった。

1928年から1929年にかけて、Eliot はめだって humanism 批判をやりだした。“The Humanism of Irving Babbitt”(1928年)とか、“Second Thought about Humanism”(1929年)とかが発表される。ついで1930年に、“Arnold and Pater”が出たのであるが、時期的にもこの三者は接近しているし、いずれに於いても Eliot の考え方と批評の進め工合が似ている。“Babbitt”で Eliot の非難する点は、Babbitt が彼の new humanism を以て、宗教に代えんとする所であるし、“Arnold and Pater”で、Eliot が論詰するのは、教養(Culture)が宗教に置き換えられる点である。

いずれも宗教に取ってかわる箇所が、Eliot の批判のまとなるので、それに Arnold の“Culture”はよくわからぬものであったが、Babbitt の“new humanism”も、宗教と面接するカナメのあたりが甚々明瞭を欠いている。つまり Arnold にあっては Culture が、Babbitt に於いては new humanism が、いずれもよくわからないものが、わからないままで、宗教に代用されようとする所を、Eliot は衝くのである。

Arnold の Culture にせよ、Babbitt の new humanism にせよ、どちらも humanism であることには違いないのであって、Eliot はとにかく humanism の機能を限定して、宗教の領域が

任意な自由な humanism によっておかされるのを防ごうとする。Eliot にあっては、もともと humanism は宗教に対して、あくまでも依存的で補助的なものとどまるべきもので、そのように humanism の機能が限定確保されていてこそ、神性 (the divine) と人性 (the human) との間の、不連続性の一線が維持されていく。この絶対的な断絶が高々とかけられていてこそ、かなたから救済が下るかも知れないのであって、従って Eliot の “Arnold and Pater” 論は、彼の Babbitt 批評らと兼ねあって、第一に Eliot の humanism 批判の確かな試論となるのである。

※

とにかく1930年代からも、Eliot の上昇期の criticism はなおもつづいていった。

かつての現代英吉利文学の、左右両翼の花々しい尖端に、Eliot と M. Murry は立っているとされた。そうしてその中間に残されたさまざまな位置をば、輓近の作家批評家たちが、それぞれ占めていると図式された。

Murry は異常なまでに詩神に憑かれた人で、祈りこそ詩の状態に向って憧憬すべきとなし、所謂『詩の形而上学』の信念から、知らざる神とか、祈願祈禱化身とかいうような秘密秘奥の言葉をしきりに吐いて、詩が実在。神。宗教にとってかわらねばならぬ所以を熱烈に披瀝しては、Eliot と真向うから対峙した。Eliot は Murry の、かかる祈祷こそ詩である信念は、ひいては詩による宗教の代用で、ひとり哲学や宗教を誤るのみならず、詩そのものを毀損すると論敵を叱正してやまなかった。

その後、両者はいよいよ左右に対極化していった。Murry の神秘詩人的宗教性は、先ず人間耶蘇に参与し、次いで英吉利的 Bolshevism に投企し、あげくは善なる自由社会が悪なる Soviet 体制に対して、先立って攻撃を開始することこそ、倫理的に正当であると闡明するにいたった。

Murry には、宥和的な逡巡は悪であった。

この間 Eliot は、ひたすら堪えよと教え、宗教に対する一切の Chidish な態度を排しつづけた。『基督教を容易で快的なものにすることは、なんのよさもない。青年の大部分は、安易な宗教よりも、困難な宗教へおもむく¹²⁾』。

1932年頃から40年代にかけて、Eliot は、すくなくも当代にあっては文芸批評の独立は許されず文芸批評は倫理的神学的観点からする批評によって完成されねばならぬ立場を打出していき、そのことと相似の文化文明批評と詩作を随伴させるのであったが、焦眉とされる至上の文学の、その創作方法の具体的問題となると、ただ詩の鑑賞者としては、例の詩の信。不信の關係の機微をつく問題の論議を経て、鑑賞者は詩人の信念と或る程度の一致のあることによって、一層よくその詩を享受出来ると、穏当にしかも無難に妥協してみせた。

創作者としての詩人の世界観と、その創作者の創作方法との緊迫した關係については、Eliot は慎重に口を緘したままだ。20年代のいわば非実践性の姿勢を、彼はどこまでも頑強に守りつづけていく。結局1922年に激発した、詩魂 Waste Land (荒地)とその領域をば、Eliot の最高の發揮と見做して、おのがじし自己創造への道に撰取してやまぬむきは跡を絶たぬであらう。

※

1930年代から星霜は流れていって、1957年になると、Eliot の “On Poetry and Poets” が出た。1951年以来の Eliot 批評を多く集めた。彼の死去前出版では、最新の評論集である。大体1940年代と1950年代にわたる、詩論と詩人論に限られたものだが、この期間の Eliot の、すな

わち最近の Eliot の、文芸批評振りを伺うのに、なによりも恰好なものと思う。

なかでもこれにおさめられた『賢者ゲーテ』“Goethe as the Sage” 1955年が、年代も二番目に新しく、色々の意味で興味をひく。第一に従来どっちかといえはむしろ嫌っていたきらいの Goethe をば、智慧 (wisdom) という言葉をつかって、Dante. Shakespeare と相並んで、傑出させたのはなんとしてもおどろきだ。

1929年の“Dante”論での、Eliot を貫く基本的な立場は、ヨーロッパを二分する傑出した詩人は、Dante と Shakespeare であり、他に第三者はあり得ないとなす断言であった。『人間としての Goethe に対する不信の念が、詩人としての Goethe に対して、それが信じられない気持ちを引き起こせる。Dante の場合はそうでない¹³⁾』。

しかるにいまや、ヨーロッパ文化の統一性を志向する Eliot としては、課題的に、Goethe を見直した上で、Goethe を偉大なヨーロッパ人であると共に偉大な詩人であるとする必要をみたのだ。そこで人間の偉大性と、詩人の偉大性と、詩品の偉大性とをば、あらためて Goethe のなかに合致させ、ヨーロッパ文化の統一性を支える基礎となそうとしたのだ。

Eliot は『賢者ゲーテ』のなかで、かつての自分の Goethe への言及が非難がましく、中傷的であったことを認める。そこから結局 Goethe と和解するように努力を払ったという。そおして Goethe が偉大なヨーロッパ人だということを確認する。偉大なヨーロッパ人であり偉大な詩人である Dante と Shakespeare に、肩を並べる Goethe がおし出されてくる¹⁴⁾。

『従ってある作家が偉大なヨーロッパ人というカテゴリに入るのは、窮極的にはその人の作品を形成している智慧の力のせいだと私は信じる。その作家がわれわれのすべての同胞となるのはその人の智慧の力のせいと思う¹⁵⁾』。所がどうもその智慧なるものが、瞬昧で判然とこない。

『詩的な信念対哲学的信念の問題、あらゆる哲学的体系に対する詩人の態度（それが信念という態度であれ、また受容という態度であれ）の本質の問題を追求することは、当面の私の主題から単にかけ離れることになるだけでなく、またひどく離れることになるのである¹⁶⁾』。われわれにはこの辺の Eliot の肩すかしが不満である。われわれは『智慧』というものへの追求が深化されて、それが不可避的に人間と詩人と詩作のぬきさしならぬ関連性に導入され、ついで Goethe の偉大性がかかげられ、そこから課題的にもヨーロッパ文化の統一性への結合が展開されていく理論を期待する。

『Goethe が最も賢明な人間の一人であったことは、私はずっと以前から認めてきた。偉大な詩人であったことはその後になって認める様になった。しかし最高級の詩人に於いては、その智慧と詩とが不可分離であったことは、その後私自身が多少賢くなるにつれて、知るようになったことだ¹⁷⁾』。このあたりのいかにもさりげないさげの調子が、あながち後期とは限らず、寔に老獪な Eliot の、巧妙にも韜晦していくおちである。

もう一つだけ、“On Poetry and Poets” のなかの“批評の境界”(The Frontiers of Criticism) を少しあげたい。1956年発表になる、当該書中の最新の評論である。

その出だしは、『本論の主題は、一方に於いてこれを越えれば、文芸批評が文芸であることをやめ、もうひとつの方に於いてこれを越えれば、文芸批評が批評であることをやめる限界というものがあるということだ¹⁸⁾』と、切りだされる。

そこでわれわれはまるでぎりぎりの所の、現代に於ける文芸批評の限界状況の決定線に、いきなり投げ出されて、いや応なしにその現代批評の存在理由の参与にせまられるような緊張を覚える。所がどうしたことか、それ以後はすぐと、これまでの過ぎにし重点的な文芸論争の数々がな

がながとなかなかのセンスを以て託宣されてくる。大御所が繰言をなつかしんでいる気がしてくる。途中『批評を書くにあたって、批評家の第一義的な関心が、読者を助けて理解させ楽しませることにあつたなら、従つてその批評家は文芸的批評家だ¹⁹⁾』などに出会つて、どうもまごつかされる。『そこで私が最も感謝する批評家は、私がこれまでになかったなにかを、偏見で曇つた眼でのみ見ていたなにかを見せることが出来るか、それと私を面接させてから私を独りにしておいてくれる人だ。こういった点から、私は私自身の感受性と知性とそれから智慧への能力に頼らなければならない²⁰⁾』。こんなふうなことが書かれていって、結びは大体、自分は現代の批評家を非難する印象を与えたくない。ここ30年来の英米の文芸批評は花々しかったと思う。そうではないか、どうだろうかと終っている。これらの後期の Eliot の批評振りの或るものは、とにかく初期の正鵠を得た論争性に対して、どうも大御所的な託宣、韜晦老獪、繰言後言がめだつていて、なんともすかさされたような気にさせられることがある。

※

もともと Eliot の論理の開陳は、自己韜晦的非個性を以て現出してくる。

神域と人域とをわけの一線がくずされ、ためにおのがじし気儘な渡来が許されてしまつて以来、そこは自由宗教が祀られるか、神が全く非在となつた世界に化した。Eliot という一人のカトリック詩人の運命的の本質は、それでも營々と不連続の深淵を掘り出そうとする。

淵は出来ずじまい。ようやく Eliot の自覚的存在を乗せる狭隘深刻な領域が抉り出されて、彼は深々とその根拠に腰を据えて身構える。どこまでもただ堪える、釣り人の姿勢だ。彼のまぶたは重々しく垂るよりにたれ、ときどき触針が延びると、獲物を追う彼の眼光が鋭く光る。沙漠のなかに閉鎖する行者の祈禱に似た音が、綿々と回帰し循環するなかで、釣り人 Eliot はひたすら糸を垂れる。釣り人をみている好奇的な眼と眼が、彼と釣り糸とその操作の存在論的技術論的分析を、積極的に取りあげるべきである。

現代英吉利文学にあつて、寔に対照の妙を極めたのが、T. S. Eliot と D. H. Lawrence の、夫々に対する対逆的方向への、彼等の脱出であつたと思う。Lawrence は対象を見据えて、正面切つて突進、激突する瞬間、火花を放つて炎上し、主客分裂以前の本源の統一へと止揚する。Lawrence は、全存在をあげて「もの」に化し終えて、絶対性をもつた観念的物質主義の実存主義の稀有な極地に現前する。Lawrence の場合、釣り人は流れのなかに身を投じ、魚の眼の奥に入りこみ、人をあげて鳥獸悉皆、帰一する所がある。

Lawrence はとにかく、現存在の根底にどぐるを巻く、くろぐろとしたニヒルの影を引抜いて、かなたの彼岸へ飛躍し、「闇」のなかの閃光のただ中にすくつと立つ。これは逃避でなく、脱出ともいえなく、脱自的に脱皮的に決行されたことだ。こうして Lawrence は、人間の根源性への自己同一化に帰還し得たとした。

Lawrence の全存在からは不断に、同根から分岐する二股的な火焰が、灼熱的に炎上している²¹⁾。彼はこの二重性をぎりぎりまで対極化していって、それを救出へと接合しようと苦闘した。愛と力の同根的な二股性は、極限まで放荷対極化されて、ついに「やさしさ」のなかへ収斂され、基督教の愛に代るべき原初的な宇宙的な愛と交合した。

一方 Eliot は、なによりも先ずすぐれた詩人とみるべきであると思うが、後期の彼の詩の無感動性、共感力の衰頹はおおうべくもない。Eliot の自我の、鷹の眼は、眼としてみることにについて執拗に存続しつづけるが、窮極的な突破を扶らずじまいだと思ふ。“四つの四重奏”(Four Quar-

tets) 1943年は、基督教的人間の魂の苦悩の表白で、神学的に自己をば諦観し慰藉してかかる。そこでは彼のカトリック精神の治療の秘奥の技術法が、時に白昼的眩惑さを以て、暗闇の真夜中を執刀する錯覚を与える。しかし冥堂に祭り上げられた精神的技術法は、ざらつく白昼性を倒錯させてみせかける、真黒の空無のなかに埋没しきった、非実践性の闇夜である。やはり『四つの四重奏』は、夕闇たちこめたなかで、自己のために捧げられている、たそがれた魂の鎮魂歌の調べときくべきである。裂開しないで、縷縷たる煙となりはてたのだと思う。

まこと瀕死の床に臥した Lawrence は、「死出の船路」の詩篇をば幾度か書きなおしては棄てて、最後にその未定稿を残して逝った。一方1965年1月4日、大詩人Eliotは、きつと巨巖のように法皇のように黙したきり、頑強になにかに堪えながら、ひたすらただただ待ったことであろう。

併しながら青年 Eliot の苦悩の核心が、人間的愛の不能と罪の意識の認めめなかに投げこまれた。若き日の Eliot の詩の脈絡は、心憎いまで見事なものであった。

※

T. R. Leavis が Lawrence 評価で、まっこうからと Eliot と対立して、Lawrence を現代では稀れな偉大性を所持する作家だと激賞してやまなかったことは、広く衆知される所である。その著者 Leavis の、'The Commentary. Nov. '58' に所載した“T. S. Eliot's Stature as Critic”をば引きあいに出して、篠田一士氏は、“On Poetry and Poets” 1951年の Eliot が、価値評価を行なおうとする対象への積極的な意志を全く欠いており、常識論に墮落したと審判している。篠田氏はなおも、Eliot の批評は、本質的には詩人としての彼の仕事の副産物にすぎず、批評が正統的にもつべき対象に対するひたむきな関与を持たぬときめつける。こういった致命的な欠陥が、最近の Eliot にはっきり露呈されていて、名声に安住した人間のうつろな響きときこえると、氏はいう。

Leavis のこの評論、筆者は未見だが、いかにも Leavis のいいそうなことを、篠田氏が的確に指摘している気がして、甚々身勝手だが同感の念に堪えない。

また篠田氏はどこかで、英吉利現代文学の文学革命は、20年代に猛烈に破裂し、30年代にかかって一応おさまっていき、40年代50年代にかけて、その整理と収斂作業に入った。そおして今は守成の季節だと、たしか述べておられた。これもなかなかよく割り切った図式である。

ただ一体なんのための守成の季節とするのであろうかと思う。今の英国のそこには、たしかに英吉利性の強化がある。picaresque な綾取りも面白い。反体制への参加がある。new left 派の動きに瞠目する。「ほっといてくれ」哲学の、若者達の切実な呻きがきこえる。

その間、1965年1月4日、巨星 T. S. Eliot はついに墜ちた。ぼつぼつと、Eliot 論が出てきているようである。昔日の彼の声誉を望む者と、望むべくもなしとする者がいるであろう。だが眼に映るものとしては、巨樹が倒れたあと、ぽかっと口あいた白々した情景である。

(1966. 9. 30)

註

- 1) T. S. Eliot : Arnold and Pater (Selected Essays, Faber, 1932, p. 379)
- 2) Ibid., p. 386.
- 3) Ibid., p. 388.
- 4) Ibid., p. 390.
- 5) Ibid., pp. 389—390.
- 6) Ibid., p. 390.

- 7) Ibid., p. 391.
- 8) Ibid., p. 391.
- 9) A. C. Benson : Walter Pater (Macmillan, 1906) p. 111.
- 10) Ibid., p. 201.
- 11) Cf. P. E. More : The Drift of Romanticism (Houghton Mifflin, 1932) pp. 86—115.
- 12) T. S. Eliot : Thought after Lambeth (S. E., Faber, 1949, p. 363)
- 13) T. S. Eliot : Dante (S. E., Faber, 1949, p. 258)
- 14) Cf. T. S. Eliot : Goethe as the Sage (On Poetry and Poets, Faber, 1957, p.p. 210—212)
- 15) Ibid., p. 221.
- 16) Ibid., p. 223.
- 17) Ibid., p. 226.
- 18) T. S. Eliot : The Frontiers of Criticism (On Poetry and Poets, Faber, 1957, p. 103)
- 19) Ibid., p. 116.
- 20) Ibid., p. 117.
- 21) Cf. H. M. Daleski : The Forked Flame : a study of D. H. LAWRENCE (Faber, 1965)